

北欧につどいて Ⅱ

一世界盲人福祉協議会実行委員会
(1981年5月4—8日 於ゲテンバーグ) —

社会福祉法人 日本ライトハウス
理事長 岩橋英行

目 次

序 文
はじめに
I. ゲテンバーグ会議におもう
1. 役員会(5月4日)
2. アジア委員会(5月4日)
3. 実行委員会(5月5日)
4. 世盲連 / 世盲協 合同実行委員会(5月8日)
II. 会議場にひろう
1. ホテルラマダの火事
2. 過ぎたるは及ばざるがごとし
3. 世盲協ともお別れしたい
4. スウェーデンの国籍を持つ日本人
5. バスの中にて
6. レセプションのひとこま
III. 施設訪問
1. 障害者専用病院を訪ねて
2. 障害者の憩いの家を訪ねて
IV. 英国ブライトンのジョン・ウィルソン卿邸とR C S B本部を訪ねて

3. 実行委員会（5月5日9:00～17:30）

世盲協、世盲連の実行委員会が、各々場所を変え9時より同ホテル内で始まった。

世盲協実行委員会は、会長ノウイル夫人の挨拶で幕が開かれた。彼女はこの春、マレーシヤで行われた盲婦人会議に出席したが、その後アジア各国、アメリカを経由し帰国した。一番痛切に感じた事は、世盲協の存在や事業内容について、開発途上国はともかく、世盲協の提唱者であるヘレン・ケラー女史を生んだアメリカでさえ充分熟知されていないという事実に、まったく驚かざるを得なかつたと述懐した。国際障害者年で、世界が共に協力し合おうというときに、盲人達が盲人関係の国連とさえ言われる世盲協を知らないようではどうにもならない、もっと世盲協を熟知させるため、国連と協力し、福祉・教育・保健関係の機構を通し、特に開発途上国の盲人ひとりひとりに、直接援助の手が差しのべられるよう努力しなければならないとのべた。

その後、アーナー事務局長より欠席者の報告があり、出席者の点呼に移った。続いて、アントワープ総会の議事録が提出され、異議なく承認。その中の重要な事項として、南アフリカとギリシャに関する問題が説明された。南アフリカを地球上から占め出すことは、特に盲の関係団体である以上しおないので、事務局から連絡文書・報告書等を、他の国にもまして多く送り、可能なかぎり多くの情報が得られるよう配慮している。また、ギリシャについては、アーナー事務局長が訪問し、ofとforの各団体の意見を聞いた上、会費を納入するという約束で、再加入を考えるとの報告を行なった。

以下、主だった事項につき区分して説明を加えたい。

① アントワープ総会以後の新加盟国と新国際団体の加入

パプアニューギニア、マラウイ、モロッコ、モンゴル、ウガンダが新加盟し、Operation Eyesight International（カナダ）が新たに国際メンバーとして加入した。（註：この時点で、加盟国は79ヶ国となり、国際メンバーは4団体となる）

② 会費未納国に対する処置と除名国

役員会の提案通り、未納国に対しては、本年末迄に意思を確認すること。トルコとチュニジアは除名が決定した。

③ アントワープ委員会報告書

1982年以内に作成する旨の報告があり、承認した。

④ 世盲協・世盲連合同ワーキング・グループ報告

世盲連側から、同時に各々この報告を行うことにしたいとの申し入れに従い、議題順序を変更し、ボルター委員長から役員会と同じ報告がのべられた。異議もなく、ボルター委員長の労苦をねぎらい全員承認した。

⑤ 各地域委員会の報告

アフリカ……委員長コナティー氏（マリ）より、アフリカは正に暗黒の大陸であり、3つの大きな難問を抱えている。①広大な地域であるため、南北、東西ならびに英語地区、フランス語地区のコミュニケーションが殆ど取り得ない。②完全なる指導者の欠員である。欠員というよりむしろ皆無に近い。③すべての盲人が食べ物を買う金知らない貧困者である。こうした3つの難問を抱えているアフリカの地域委員会は、より貧困である。そのため、世盲協、世盲連の選別といったぜいたくな事をやっておれる状態ではないので、今、Pan-African Organization of the Blind（アフリカ盲人連盟）を組織した。これは、of/forのいずれにも属さないもので、アフリカ地区が地球上からみればあまりにも未開発であるという理由で、特別にこの団体の設立を承認してほしい。この団体には5人の副会長を置き、各国に各々1名の代表者を置いて、5人の副会長と緊密な連絡を取りつつ、失明防止・福祉・教育を推進して行きたい。指導員の養成を行うため、本年、ザンビアとセネガルにおいて指導員養成講習会を開くことにしている。また、昨年来よりHKIの指導により、セネガルとマラウイにおいて、農村におけるリハビリテーション、言いかえれば中国における“裸足の医師”をまねたフィールド・ワーカーの養成訓練を行なっている。マラウイとコンゴにおいては、英語を話す地域の指導者養成講習会が開かれ、スペイン語を話す地域には、昨年来スペインからの援助が始まっている。ノルウェーにおいては、開発途上国に対する失明防止、指導員の養成、盲人団体の育成をスローガンにして募金をしつつある。一応、ある程度の募金が集まつたので、スーダンに対し盲人団体育成事業を開始した。

アジア……委員長アフジヤ氏（インド）より、アジアにおいては、第7回岩橋武夫賞が世盲連前会長ファティマ・シャー博士（女性）に対し贈られた。また、大阪において、アジア委員会歩行訓練指導者会議が開かれ、組織的に3地区（A、B、C）に区分され、各々の地区にリーダーが置かれ、日本ライトハウスの関宏之氏が委員長に就任した。今後のこれへの継続的な運営費を、超経済大国日本に無条件で援助してもらうべく運動中である（視覚障害研究第13号（81-1号）参照）。統いて、1981年3月にスウェーデンの援助により、世盲協と世盲連の合同婦人研修会がマレーシヤにおいて開催され、会長ノウィル夫人が出席した等々の報告がなされた。

北米・オセアニア……委員長ウイルソン氏（オーストラリア）より、北米・オセアニア地区においては、スポーツ、レクリエーション等が盲人団体の主な活動であり、盲人団体が今だその国で圧力団体とか要望団体である限り、完全な先進国とは言えない。そうした意味から、我々の地区は先進国である。この会議の席上、今自分の座っている周囲には、アフジヤ氏（インド）、岩橋氏（日本）、ウィニーさん（マレーシヤ）等がいるが、これだけを見ただけでわかるように、我々の地区はこうした国々に対し援助や協力の手を差しのべるのが役目であると、上手な説明と報告を行なった。

ラテンアメリカ・カリビアン……委員長プラデラコボス氏（コロンビア）より、ラテンアメリカ・カリブ海地域委員会では、鶴が地球を取り巻いて飛んでいる図柄を委員会のシンボルマークとした事の報告があり、失明防止・教育・盲人用具・スポーツ・レクリエーション等、こと細かな説明があった。

中近東およびヨーロッパ……中近東委員会は、委員長のアルガニム氏（サウジアラビア）が欠席のためペーパーが朗読された。いつもの報告通り、龐大な金を投入して中近東は設備投資におおわらわである事をのべ、ヨーロッパ委員会は、委員長ニコル氏（フランス）より、優雅な福祉地区としての報告がなされた。

⑥ 常任委員会報告

財政委員会……役員会で報告された通り、コリガン氏から説明があり承認された。
社会開発委員会……委員長ジェンセン氏（デンマーク）の辞任が認められ、新たにガテマラのデ・スター夫人が任命された。尚、同委員会に付設されている盲児委員会は、ユネスコやICEVH（世界盲教育者会議）の中にも既にあるので設置必要なしとの結論に達したが、委員長の選択に任せることにした。

文化委員会……委員長ノウイル夫人（ブラジル）から、国連での版権問題の動き、点字図書、トーキング・ブック、盲人用具、盲人の芸術等につき、こと細く説明があり、会長と文化委員長との兼任には無理があるので、イタリーのケルビン博士に譲りたいとの意思表示があり、異議なく承認された。

リハビリテーション、訓練、雇用委員会……委員長デサイ氏（インド）より報告がなされた。昨年7月、西ドイツのハノーバーにおいて委員会を開催した。西ドイツのガイスター博士から非常な援助を受けた。現在、同委員会としては、開発途上国、特に農村地区に対して重点的に仕事をしている。HKIと協力して南インド、フィリピン等において、フィールド・ワーカーの養成を実施している。更に、インドではこの春、農村地区における指導者養成講習会等も開いた。10月にはスリランカで開かれるアジア委員会で、世盲連と協力して農村地区におけるリハビリテーションの方向づけを作りたいと考えている。サブ・コミティーとしては、オーストラリアのホールズワース氏が委員長となり、盲導犬、白杖を使用しての単独歩行の行動訓練委員会が活発に活動していると報告された。この時、突如アフリカ（マリ）のコナティー氏が発言を求め、「ホールズワース氏が盲導犬の事について活躍をしてられる様子を聞いたが、アフリカではロバが盲人を導いている。その国々、地方に応じて使える動物を、盲人のガイドとして訓練してはどうか。」と言った。デサイ氏は、「では、ホールズワース氏に、オーストラリアでカンガルーを訓練するよう伝える。」と答弁したので、固苦しい場内が一度に爆笑、素早くアフジャ氏が立って、「大阪の歩行訓練指導者講習会において、オーストラリアではカンガルーが有名である。盲導カンガルーといったものが出来ないのかといった話があった」とつけ加えると、更に場内は大爆笑、数分間笑いは止まらなかった。以後、人々は顔を合わすごとに、

「君は国に帰って、盲導犬か盲導ロバか盲導カンガルーかどれを取るのだ」と話に花が咲いた。こうしたユーモラスな話は、必らず1回か2回、国際会議の中に突如として出現し、ぎすぎすした雰囲気を和らげるのに大きな効果をもたらすものである。

失明防止委員会……委員長ウイルソン卿（英国）から報告があった。現在、地球上には4,200万人の盲人が存在する。50年後には、悲しいことではあるが、この2倍もしくは5倍に増加するかもしれないとの予測がたてられている。しかも、先進国で多くみられる失明原因の1つである糖尿病、老人性白内障が開発途上国にも多くみられるようになってきた。医学の発達は、皮肉にも人間を長命にし、その結果、失明する老人が爆発的に増加した事は、いかんともしがたい。厳粛な事実である事を、今我々は受け止めねばならないとの報告があった。

続いて、ガテマラのデ・スタール夫人、マリのコナティー氏から、オンコセルカイアシス（リバー・ブラインド）の説明があった。当初、媒介をする虫は蠅または蚊と思われていたが、研究の結果、ブヨである事がわかった。また、それが急流に棲み、媒体としてどのような役目を果たすかも解明されるようになった。その結果、ある地区では完全にブヨが撲滅されても、これは非常に長距離を飛ぶので他の場所に移動するという事もあり、更に、一時撲滅してもまた再発生する事もあるとの報告がなされた。この結果、全村盲人であるという悲しい事実が発生し、既に盲人になった人々への対策、移動するブヨの撲滅をいかにすればよいかとの専門的な討議がなされた。

開発途上国援助委員会……委員長ロバーツ氏（アメリカ）より報告があった。同委員会は、ヘレンケラー・インターナショナル(HKI)、英国海外盲人援護協会(RCSB)、クリストファー・プリンデンミッション（キリスト教海外盲人援護協会/西ドイツ）、ならびに英国政府、スウェーデン政府、西ドイツ政府、アメリカ政府と国連各諸機関との協力の下、開発途上国の福祉・教育に重点を置いて活躍して来た。特にHKIは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの農村地区に対して、フィールド・ワーカーの養成、クリストファー・プリンデンミッションは、開発途上国の失明防止と盲教育に力を注いだ。一日も早く、日本もこうした開発途上国に対する援助国の一員として参加する事を切に望みたい。自分も近く引退したい、よってスウェーデンのハガマルム氏を推薦するという事で、全員これを承認した。（このスピーチは、ハロルド・ロバーツ氏の最後のものとなった。引退間際なので元気がないのであろうかと言っていた人もあるが、まさかこの会議の約1ヶ月後に逝去されるとは、誰一人予想だにしなかった。）

盲婦人の地位向上委員会……委員長アニン夫人（ガーナ）より報告があった。スウェーデンを含めた北欧諸国の援助によって、アフリカ、アジアにおいて盲婦人のセミナーを持つことが出来た。これは報告書が出るので、詳しい事は省くとの説明後、

アジア委員会に対し連絡なしで会議を開いた事の謝罪があった。婦人と男性の優位性につき、ノウイル会長が付け加えた。アジア、アフリカの各会議場で、報道関係者より、「今、世界では女性・男性のどちらが優位であると思うか」との質問を受けたが、自分は主婦としての立場から、行動性については男性が優位であり、その男性を遠隔操作するのは女性であると答えた。自分が思うには、外で働く男性であっても必ずしも家に帰って来る。一見、家庭で男性が優位を占めているかの如く見えるが、結果的には女性（主婦）が家庭をしっかりと守らねば、男性の外での充分な働きは期待出来ない。その優位性は、取り方によって違うと答えた旨、報告された。優位性を競い合うよりも、男女の協力が必要である事を彼女は強調した。

盲聾委員会……昨年7月、西ドイツ、ハノーバーにおいて、西ドイツ政府の後援により、ヘレン・ケラー女史生誕100年を記念して盲聾世界大会が開かれた。世界各地から120人近い人々が集まり、今後の対策を協議した。委員長スミスダス氏（アメリカ）が欠席なので、アーナー事務局長が代読した。会長ノウイル夫人から、盲聾の方々が明るく活発にダンスやゲームに興じながら楽しい会議を終えた事に感動した旨のコメントがあった。

ルイ・ブライユ記念委員会……委員長ニコル氏（フランス）より報告があった。ルイ・ブライユの生家は老朽化したので、床を張りかえ暖房設備を整えた。壊れた個所は補修し、やっと見られるようになった。管理人が年を取ったので、クーブレーの村長に頼んで新しい管理人を雇った。世界各国から毎年2千人近い人が訪問するが、維持費、管理人の給与捻出のため、今まで以上の寄付を願いたい。訪問者中、多い人で8千フラン（約40万）、少ない人で200フラン（約1万円）が寄付されているとの報告があった。

スポーツ委員会……委員長ピーラッシュ博士（東ドイツ）より報告があり、各国協力の結果、4月にパリにおいて世界盲人スポーツ協会（IBSA）を発足させる事が出来た。加盟は、ヨーロッパ14ヶ国、アフリカ5ヶ国、中近東2ヶ国、アジア3ヶ国、北アメリカ・オセアニア4ヶ国、ラテンアメリカ2ヶ国、合計30ヶ国であるとの報告後、コロンビアのプラデラーコボス氏より質問があった。「世界盲人スポーツ協会が出来た以上、世盲協のスポーツ委員会が必要か否か」というものである。多くの意見が交わされたが、結局1984年の世盲協総会において決定すべきで、世界盲人スポーツ協会が国際メンバーとして、ちょうどICEVHのごとく世盲協と関係を持つてはどうかとの意見にまとまった。全員からピーラッシュ博士に対し、その実行力と推進的役割を果たした指導力に対し、賞讃の言葉が送られた。

⑦ ICEVHの報告

委員長スタイン氏（西ドイツ）が欠席につきアーナー事務局長より代読された。明年8月、アフリカのナイロビにおいて総会が持たれる。テーマは「明日にかける橋」である。つまり盲人とそれを囲む環境にかける橋で、家族に――、学校に――、

教室に——、社会に——、といった橋のかけ方が問題の焦点になる。

⑧ 国際障害者年に対するアピール

世盲協と世盲連が、国連ならびに各国政府に対し、連名にて書簡を送りたいとの提案があった。その内容が朗読された。その中で、特に盲人の職業問題に関しては、日本等にみられる身体障害者雇用法において、従業員に対し何%雇用という事が明記されているが、こうした%での明記が果たして効力があるのか否かの討議がなされた。「%の数字を列挙しても守られなければ何の意味もない」という説や、「列記して罰則をもっと重くすべきである」という説や、「そうする事は、かえって雇用の阻害になる」という考え方がある。各國から発表された。次に、老令年金・福祉年金についての意見が出された。いちがいにアピールの中に取り入れようと書いても、開発途上国では何の効果もないという意見が出た。そこでジョン・ウイルソン卿は、「一般の人でさえ保障制度もない国もあるので、既に社会保障制度を実施している国に対しては、より盲人にに対するきめ細かな法的改善制度を希望するアピールに書きかえてはどうか」との意見が出された。こうした討論の結果、教育・福祉・職業・失明防止等々にわたり、より詳細に世盲協・世盲連側の両事務局長が検討して案を作成する事になった。勧告書は速やかに国連加盟国政府に送付すること。それ以前に、こうした書簡を各國政府に送るという事を、各報道関係者に通知する事が決められた。勧告文は下記のとおりである。

各國政府主席殿

1981年国際障害者年にあたって

国連は1981年を国際障害者年として宣言しました。多くの国々の政府が、この年を記念して盲人のリハビリテーション、また社会統合等を促進するために数々の活動行事等を行なっておられる事を非常に喜び感謝しております。しかし残念なことに加盟している国々あるいは盲人関係の施設等からの報告によれば、まだ多くの国でこうした関連の活動が盲人の状況進歩のために計画されていないと聞いております。

盲は特に重度の障害であり、教育、リハビリテーション、社会統合等は、政府の強力な支持がなければ、効果的に行う事が出来ないという事を思いますとき、私どもは閣下に対し、次のような提案を是非取り上げて頂きたいと要請するものであります。私どもとしては、すでに盲人の状況を向上させるために行われている色々なものは、今後とも継続されなければならないと思いますし、またそれ以外に新らしい方法を取り入れて、盲人の生活に直面している色々な障害を取り除く努力が行われる事が肝心であると考えます。貴国政府に対し次のようなものを含んだ国内的な行動計画を是非おたて頂くようにおすすめしたいものであります。

1. 盲児および盲人に対し、その年令、能力、適性などを考慮に入れて無料の学校教育、職業訓練などを行うこと。またそれは小学校、中学校、専門学校、大学の

レベルにまですべて普及すること。

2. 盲人に対してその障害を出来る限り少くして教育を受け、成人の場合には雇用の場を与えるために必要な器具、補装具等を無料で配布すること。
3. 盲人が工場、農村、商売、商業、専門的な職業等民間、公立を問わず職場を得ることが出来るように、それを援助する事業を開始する事。
また、まだそれがないところでは、盲人の雇用を保障するような法律なども立案すること。
4. 盲人およびその家族に対しては無料で保険医療のサービスを受ける権利を与えること。
5. 盲人が、貴国的一般の人達と同じ年令において退職年金を受ける権利を与えること。
6. 盲によって生ずる各種の費用を充たすために盲人に対する盲人年金を設置すること。
7. 図書館サービス、点字や録音による本を無料で盲人が利用出来るよう、その生産・配布を行うこと。
8. 政府の援助や勧告によって盲人の国内団体を設置し、その団体を通して盲人が社会に参加し、またその中において重要な役割を果たすことが出来るようにすること。これによって盲人達が自立し、また自尊心を持って生活が出来るようにすること。
私どもは、これらのポイントのほとんどは既に多くの先進国においては実現されている事を知っております。また開発途上国においてもこうした面を既に実行に移している国もあります。
どうか貴国政府におかれましても、もし存在している場合には、その範囲や効力を一層増進するよう必要な処置をおとり頂きたいと思います。
- 我々の要請を好意的にご考慮頂き、これらのすべてあるいは一部でも、この重要な世界的な国際障害者年という年に実行に移されますよう、また移されます場合に私どもにお知らせ頂ければありがたいと思います。

ご厚意あるご回答を期待し心から御札を申し上げます。

以上

1981年9月1日

世界盲人連盟 会長 Dr. フランツ ソンターグ
世界盲人福祉協議会 会長 ドリナ・デ・グーベア・ノウイル

⑨ 世盲協定款改正

定款改正委員会でつくられた改正案が提出されるや、俄然会議場が緊迫した。ノルウェーのウズベグ氏が、役員会の見解如何との質問に対し、ノウイル会長は、前

日、役員会で申し合わされたように、重要な部分を列挙して「役員会としては反対である。よって、総会までに今一度、定款草案を役員も参加しながら再作成したいという役員会の意向を基にしたうえで、討議を始めてほしい」と発言した。しかしウズベグ氏が、強硬に逐条審議を要求したので、役員会の意向をふまえながら逐条審議することになった。

まず、名称では、「of the Blind」、「on Blindness」に対し、インドのデサイ氏とアメリカのアップル氏の絶対反対の演説があり、続いて英国のコリガン氏がオックスフォード辞典を引用して、「Welfareとは、Well-beingであり、何ら慈善的意味を持たない」という意見を述べた。ソ連のジミン氏が、「ソ連においてもWelfareと同じ言葉があるが、決して慈善という意味ではない」と述べた。続いてフランスのニコル氏が立ち、「World Council of the Blind」という名称こそが最もふさわしく、「of the Blind」とすべきである」と発言した。これに対し中近東の代表が、「of the Blind」の思想は若い世代の考え方であり、こうした若い我々の考え方を老令のニコル氏が賛同してくれたのはまさに意外であり尊敬に値する」と述べた。続いて「世盲連と世盲協がいずれ合併するのであれば、ことさら平地に乱を起こすような事をすべきでない」との意見も述べられた。しかし一方、「世盲協側からof the Blindを積極的に主張して、世盲連を包括してゆくべきである」との意見も出た。ジミン氏が再度、「今、年寄りと若者といった発言があったが、これはけしからん事である。年寄りであろうが若者であろうが、正しい思想には変わりない。血氣にはやり、乱を起こすような事は若い者の特権であるにせよそれは大局を見失う。年寄りの私の意見を聞くべきだ」という発言で、老年とは言えそのしっかりとした信念に対し、賛否の枠をこえて全員が拍手を送った。結局、採決の結果、名称は変更せずという事になった。

次いで、アメリカのミラー氏から「3つの点について討議を願いたい。1. 名称 2. 機能 3. 投票権と会員」との発言があった。インドのデサイ氏が、「名誉終身会員から投票権を剥奪する事は、感謝状を出して明日からは出入禁止と言い渡したようなものである。また国際メンバーから投票権を取る事は、世盲協の崩壊につながる。どうしてもこの定款改正案を通したいのであれば、旧定款を支持する人だけで即刻新しい会を作り、その人達によって世盲協を継続してはどうか」との反対演説があった。次いでウィルソン卿は、「RCSB、HKI、CBの3つの団体の事業費をトータルしただけでも1500万ドル以上（約30億円）となり、これが世界の開発途上国の失明防止や盲教育に使われている。今、こうした団体を世盲協から省いたり投票権を剥奪したりするなら、かかる団体が世盲協から手を引くことになりかねない。世盲協は当初発足以来、国際的立場において全地球的にものを眺めるという方針を取って来た。にもかかわらず、国内代表のみに投票権を持たせ、国際メンバーが投票権を外すという事ならば、非常な片手落ちである。こうした新提案に対しては、

根本的に反対する」との発言があった。(この後、昼食のため休憩し、午後から再開)

まず、アップル氏(アメリカ)が、「全米失明軍人協会としては、ウイルソン卿の案に全面的に賛成し、新しい定款案については否定する」と発言した。続いてウイルソン氏(オーストラリア)が、「オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、北米としては、定款改正案について絶対反対する」と発言。続いて、岩橋から「世盲協においては、各国が選ぶ代表会員と、片や名誉終身会員プラス国際メンバーの2つの柱がある。この2つの柱こそ、車の両輪のようなものである。このどれか一方が欠けても崩壊につながるので、いかなる理由があっても、名称・組織・機能とも変更してはならない。」とのべた。ノルウェーのウズベグ氏が再度、「ジミン氏の述べた発言はおかしい。年寄りの意見を聞けというが、ここに出席している人々は殆ど50才以上ではないか、何を基準で若いとか年寄りとか言うのか。また、デサイ氏も世盲協をつぶした方がいいといった発言をしたが、これもケシカラン発言である。ジミン氏は陸軍大佐であり、デサイ氏は陸軍大尉である。こうした軍人出身の意見を聞く必要はない」と、まるで感情論まるだしの発言にエキサイトした。また、議長が婦人であるため、テキパキした処置がとれず、より混乱を招いた。しかし最後に、役員会提案を可とする者16票、定款改正案を支持する者10票、欠席2票、中立2票で、役員会提案通り否決され、1984年次期総会まで役員会と定款改正委員会によって、今一度改正案を練り直すことに決定した。

続いて行動計画案が審議された。これに対しボルター氏が意見をのべた。「この案はまさに急進的である。例えばすべての国は伝統的寄宿舎制盲学校教育を廃止して、統合教育にふみきるべきであるとか、すべての盲人は授産場から出て、一般企業に就職させるべきであるとか書かれているが、一見、理想のごとく見える。しかし盲学校ひとつにしても、英国、日本、西ドイツ、フランスのように既に100年近い盲学校の歴史を有している国々では、そう簡単に統合教育に移行出来るものではない。また、一般企業にと言っても、重複障害の場合は不可能であろうし、自家営業をしていと望む盲人もある。1つの枠にはめて、かくかくすべきであると言い切る事は、世盲協として決して望んでいない。あくまでもその地域・国・個人の自主的な選択の自由によって決定すべき問題である。」とのべた。この発言に対し、北欧3国、アフリカ圏、アジアの一部から、定款改正同様にノルウェーのウズベグ氏を中心にして反対の火の手が上がったが、所詮正論に抗すべくもなく定款改正委員会が不眠不休で作り上げたこの計画案も、各委員会で検討のうえ再提出という事になった。

⑩ 議事運営規則

今まで世盲協が行なって来た議事運営は、世界各国の人々が集まっている関係上、投票の仕方、可否同数の場合、発言の順序、採択の仕方、等々多くのトラブルがあった。よって、再度ロバート法を中心にして規則が作成された。これはサンパウロ会議の役員会で検討した原案通り通過した。

⑪ 常任委員会規約

「常任委員会規約の中で、第3、7、11の3項目中、各委員会のメンバーは役員会の承認を受けねばならない。これを会長の承認のみで選出が出来ないか、また、各常任委員会が行動計画を立案した場合、役員会の承認を受けていたのでは、毎年1回しか開かれない役員会では向こう1年間待たねばならない。こうした件につき、もっとスムーズな方法がないのか」と、ウイルソン氏（オーストラリア）の質問があった。これはアドバイサーとコンサルタントとの英語の使い方によるのではないかとの主張が取り入れられ、変更された事になった。

続いて、議事運営の規約中、「定款改正に要する票数は3分の2であるが、これは何をさしているのか」とジミン氏からの質問があった。更に岩橋から「3分の2とは、出席代表会員数の3分の2か、代表会員総数の3分の2なのか」と重ねて質問した。これに対し、「出席者プラス委任状数の3分の2である」との見解が取られたので、その旨を“3分の2”と記された後に挿入する事になった。

次に、常任委員会開催の場合、“会長・事務局長の承認を経て”と訂正された。

⑫ 次期総会

a. 開催地……次期総会の選定については、役員会の決定案が提案された。しかし定款改正案同様また意見が2つに分かれ、激論となった。中近東かパリかという事で、中近東の場合は、サウジアラビア政府が金を出し、場所はヨルダンかバーレンという事で議論が進められた。

混乱した原因は、アントワープ実行委員会において決議された“誰もが自由に入れる国”を総会地として選定するという案を取るならパリであり、この決議を無視し、ひたすらサウジアラビア政府の旅費以外一切負担するという経済的理由で選ぶならサウジアラビアという事であった。結局、中近東が16票、パリ7票、中立6票で、次期総会地は中近東に決定した。

b. テーマ……まず「団結」と「統合」の2つの意見が出された。インドのアフジャ氏が、「団結とは労働組合の好んで使用する言葉であり、不適当である」とのべた。ソ連圏から猛烈な反論があるのではないかと人々は一瞬ヒヤリとしたが、何らの反論もなかった。そこで「団結」を省き「統合」をとるようにしたが、ボルター氏が「Integration（統合）だけではもの足りないので、Independent through Integrationにしてはどうか」と発言した。全員これに賛同した。直訳すると、「統合を通しての独立」という事になるが、朝日新聞の藤田氏と協議の結果、日本語には今少し色をつけて「社会参加を通しての盲人の独立」にした。

c. プログラム委員長ならびに委員……総合プログラム委員長は辞退する人が多かったが、中近東に最も近いという理由で、インドのアフジャ氏が条件つきで受諾した。その条件とは、各地域委員長、会長、事務局長、会計、ジミン氏、ボルター氏、岩橋を委員に入れるというものである。この条件に対し全員賛同した。

ノウイル会長から、スウェーデン盲人協会、当ホテル、ゲテンバーグ市、ボランティア、その他に対し感謝の言葉が述べられ、世盲協実行委員会は終了した。

4. 世盲連 / 世盲協合同実行委員会（5月8日 9:00～17:00）

昨日まで世盲協の実行委員会会場であった場所へ、世盲連のメンバーが参加した。よって、席もスシ詰めとまではいかないが相当混み合っている。合同の実行委員会は、両団体の会長が交互に議長を務める事になっている。

最初に、西ドイツのゾンターク博士（世盲連会長）が立って、当地スウェーデン盲人協会会長リンドクビスト氏を紹介した。彼は、世盲連・世盲協が仲良くスウェーデンで会議を持ってくれた事の喜びを述べ、以下の3つの柱を強調した。「その1つは、今年は国際障害者年である。障害者の完全なる社会への参加と平等、このテーマは世盲連・世盲協ともに異議のあろうはずはない。2つの団体が協力して実現を目指さねばならない。往往にしてこうしたものは、宝石箱の中か飾り棚に置物として眺められる傾向があるが、そうした弊害に陥る事を戒め、両団体がこれをいかに各国、地区で実現するかを考えるべきである。そのために本会議が向こう10年間の第一歩であってほしい。第二は、“参加”という事について考えたい。参加とは、ただ社会の中に盲人が存在するという意味ではない。職業、教育、経済活動、政治活動、日常生活、等々あらゆる人間の社会活動を通じ、社会と共にいるという姿である。しかしそれをするには、あまりにも社会との溝は深く壁は高い、まずその“障害”除きから参加は始まる。第三は、社会参加を実現するためには莫大な財源が必要である。特に開発途上国においては然りである。そのためスウェーデンは、アフリカに対し農業訓練、失明防止、指導員の養成、盲学校教育用具の配布、更にはアジア・アフリカの盲婦人に對し指導員養成の費用等を提供してきた。英国においてはR C S B、アメリカにおいてはヘレン・ケラー・インターナショナル、西ドイツにおいてはクリリストフェル・ブリンデンミッショナ等が、莫大な費用を開発途上国に投入している。平等という事を国連が定めているが、先進国と開発途上国の差別ほどひどいものはない。この地球上において、自国が先進国であると自覚された国は、英・米・スウェーデン・西ドイツ等にならって、具体的な援助を一日も早く実施されるよう願いたい」と述べた。隣にいたアジアの国々の代表が、小声で「あれは、日本に開発途上国に対する援助を催促しているのだろう」と、いやみ半分、ひやかし半分で私の耳にささやいた。日本において開発途上国の盲人のために援助を行なっているのは、アジア眼科医療協力会と日本ライトハウスのみである。金額で比較するのはどうかと思うが、西ドイツ・アメリカ・英国等の援助額からみれば、数十億と数百万円の違いがある。

次に、UNESCO のサンドバーグ氏がUNESCO 事務総長の祝辞を読み上げた。この国際障害者年は、1976年に国連の制定したものである。UNESCO においては、

盲関係では、点字楽譜・数学科学記号の統一、盲教育、統合教育等につき関係を持ってきた。UNESCO の中においてさえ、今年の障害者年までは、特殊教育は一般教育から切り離され特別視されて來た。よって、特殊教育を担当する我々としては、誠に不愉快であった。しかし今年を契機にして、UNESCO の中から特殊教育部というものは姿を消し、一般教育の中で扱われる事になった。その後ILO、WHO、UNICEF等々、国連諸機関の事務総長祝辞が朗読された。

① 岩橋武夫賞贈呈式

突如として「岩橋武夫賞の贈呈式を挙行する。岩橋さんに岩橋武夫賞の説明を願う」と、ゾンターク会長から発表された。もっと後で行う予定であったので、あわて壇上に上がった。岩橋からの説明として「岩橋武夫は大正6年、早稲田の理工科に在学中に失明した。自殺をはかったが、母の力により人生の再出発を決意した。関西学院に学び、その後、勧めにより英国のエジンバラ大学に学んだ。無一物の中に苦学を続け、エジンバラ市民・学友達に助けられ、一番で同大学を卒業した。彼は岩橋武夫づくりに参加してくれたエジンバラの有名無名の人に対する感謝を、いかにして表わそうかと考え、学者として立つより、日本とアジアの盲人のために生涯を捧げる事を誓った。昭和9年、ヘレン・ケラー女史と会い約束をした。彼女は昭和12年、23年岩橋武夫の招へいにより日本を訪れた。その結果、盲ろう義務教育制、身体障害者福祉法、社会福祉事業法、等々の各種法律がつくられる素因となった。女史との約束は、岩橋武夫はアジアを、女史はアフリカとラテン・アメリカを考える事であった。約束に従い、病苦の身体に鞭打ち、昭和23年からアジア盲人福祉會議を日本において開くべく準備した。昭和30年に日本政府が責任を持って第1回アジア盲人福祉會議を東京で開くとの決定の知らせを聞いた翌日、力尽きて他界した。昭和29年10月28日であった。岩橋武夫の思想は、何よりも盲人達が相互に理解し愛し合う事であり、社会と盲人の間にある壁を取り除く事であった。1973年、第4回アジア盲人福祉會議（於ポンペイ）で、アジアにおいて忘れる事の出来ない岩橋武夫を記念するため、岩橋武夫賞が制定された。彼の古い友人であったシャープ（株）会長早川徳次氏は、この顕彰制度制定に際し、100万円を寄贈した。この利子により毎年一国一人に対し、盲人のために働いた人々に賞状、楯、賞金（10万円）が贈られている。アジアに住み、アジアの盲人のために働いた人であれば、晴盲の区別はない。今回パキスタンのファティマ・シャー夫人に贈られる事になったが、彼女は世盲連の前会長として活躍し、婦人の身ではあるが、その働きには目をみはるものがあり、岩橋武夫賞を受けるにふさわしい人である」と述べた。

続いて、アジア委員会委員長アフジャ氏から説明があった。「この賞は、岩橋武夫氏の誕生日である3月16日に、各国において授与されるものである。しかし今回、たまたま世盲連と世盲協の合同実行委員会が開かれた。協力というのが我々のテーマである。かかる意味において、世盲連の前会長ファティマ・シャーに世盲協が定

めた岩橋武夫賞を贈る事は、協力という名にふさわしい事ではないかと考えた。ファティマ・シャー夫人は、非常に美しい産婦人科の医者であった。しかし中途で失明した。主婦としての仕事もあったにかかわらず、盲人運動に精魂を打ち込み、今日の世盲連の基礎作りをした。彼女は各会議場で奮進独走と思われるほどの熱弁家であり、勇猛果敢な闘士であった。例えば昨年タイ国で開かれた国際障害者年の役員会でも雄弁に語り、彼女と世盲協は常に大激論を闘わして來た。しかしそれは同じ目的のために行なった事である。今、世盲協、世盲連といった壁を取り除き、彼女に賞を贈る喜びを伝えたい」と述べた。

ノ威尔世盲協会長が世盲協を代表して、彼女に賞状・楯・賞金を授与した。一齊にライトがつき、テレビ局・新聞社等のフラッシュがたかれカメラが回り出した。突如理解出来ない事が起こった。マレーシヤのウニー女史に手を引かれたシャー夫人が、ノ威尔会長から水ひきのかかった金封を受けとるや否や、横のテーブルに賞状と楯を置き、封を切って中から10万円を抜き出し勘定し始めたのである。一番驚いたのは事務局長のアーナー氏で、飛んで来てやめるよう注意した。その間もテレビカメラは撮影を続けている。人々の心に、盲なるがゆえにか? 礼儀を知らざるがゆえにか? パキスタンの風習なるがゆえにか? の疑問が一瞬よぎった。しかし、拍手はそれにかかわらず彼女に絶大なる祝意を表した。

休憩時に、シャー夫人は興奮と喜びに気もそぞろに私のところにやって来て、「以前から貴方の思想と実行力に多大なる尊敬をはらっていた。世盲協の副会長ではなく、親子二代盲目の身でありながら、我々アジアの盲人のためにすべてを捧げてくれている岩橋家に対し、心からなる敬意と感謝を送りたい」と握手を求めてきた。その後、アフリカ各国からも握手せめにあった。彼等は口々に「岩橋という名前は知っていたが、詳しくは知らないかった。まず、同じ有色人種でありながら、1925年エジンバラの地に無一物で留学し一番で卒業、更にヘレン・ケラー女史の最も親しい友人であり親類づき合いをされた岩橋家、しかもまた息子の貴方が失明、世界の盲人のため世盲協の副会長として活躍、その実行力と指導力に対し、この際心からなる感謝と激励を送りたい。出来得れば、アフリカ地域にも是非岩橋武夫賞を制定してほしい」と、巨大な真黒い人々に囲まれて、160cmの小さな私は握手せめにあった。「残念ながら同じ有色人種として、アフリカにも制定したいがアジアの盲人福祉の夜明けをつくった人として岩橋武夫賞がつくられたのであり、それは無理である」と丁重に断わった。

② 両団体の各委員会報告

ノ威尔会長から、世盲協・世盲連合同のアジア / アフリカ盲婦人セミナーについて報告があり、両会長から世盲協・世盲連の合同ワーキング・グループに対して、特に最も難しい仕事であるこの委員会をトラブルなく運営して來たボルター委員長に対し、感謝の言葉が更に満場からも万雷の拍手が送られた。

続いて、「急いで両者が1つになるのではなく、協力という旗印をもって時間をかけ、実の熟するごとく時をまって1つになろう。それまではこのワーキング・グループが両者のかけ橋をしてほしい」との話のあと、世盲協側から各地域委員会、各常任委員会の活動報告がなされた。

③ 世盲連会長あいさつ

世盲連会長ゾンターク氏が代表して、流暢なドイツ語と活力あふるるヒトラー語調でスピーチが始まった。「午前中、世盲協会長ノウイル夫人は、出来るだけ世界の各地を廻りその実情をつぶさに知りたいと言い、世界を飛びまわった報告でしたが、あいにく我々世盲連は貧乏団体であり、そうした金は持ち合わせていない。昨年、ヘレン・ケラー生誕100年祭にあたり、アメリカを訪問した。その時、アメリカの障害者に対する国家予算額は実に\$200 billion(約4兆円)にのぼる事を聞き驚いた。これはまさに小さな国全國家予算以上の金である。しかもアフリカ、アジア地区には、この何百分、何千分の1しか盲人関係予算はない。まずこの事について諸君はどう思うか、この予算中3分の2が盲人のためには使われず、盲人のためと称して晴眼者の給料に支払われている。今一つは、役人がデスクプランを作り、盲人には必要でない無駄な事業(例えは、同種類の施設の乱立、安易にして手のつけやすい同種事業等)に支出されているのを見ると、それは盲をダシにした欺瞞予算であって、我々はそれに最大の关心と批判を加えねばならない。for the Blindが歴史的に果たした役割に対し、敬虔なる感謝とその価値を認めるものである。また、今後ともにof the Blindと手をつなぎ協力体制をしく事を望みたい。しかしさメリカの例にもあるごとく、for the Blindは、往々にして盲人をダシにし自分の売名や事業欲のために金集めをしたり、地方公共団体、国から予算を引き出そうとしてきた。一つの盲人事業が成功すると、我也我もと無駄な金をかけ、同じ場所で同じ仕事をしたりするさまを見るとき、それは盲人のためでなく事業欲か売名としか考えられない。かかる行為を行うものこそ、盲人であろうと晴眼者であろうと、盲人をダシにした偽善者であると断ぜざるにはおれない。世盲連は金がないため、世盲協のような完備された委員会はない。しかし、アジアにアジア地域委員会が設けられ、この10月に世盲協と世盲連の合同地域委員会が開かれる事は誠に喜ばしい事である。ヨーロッパ地域委員会においては、我々の不平と不満を社会にぶつけ、理解ある協力を求めんがため、E E Cの本部に対し一大デモをかけ、我々の要求を通すよう働きかけた。このようにして世盲連は、盲人であろうが晴眼者であろうが、こと盲人をダシにするものとは徹底的に闘い差別をなくすため日々闘争を続けているのである。世盲協と世盲連が協力するという意味において、サウジアラビアのアルガニム氏から、次期合同総会の招致申し出があった。我々は喜こんでこれを受ける。これこそ協力の良き見本である。しかしリヤドで聞いてもらっては困る。何故ならば、既に諸君も体験されたごとく、かの国ではウイスキーが飲めない。」(爆笑)との演説が

あった。かつての第二次大戦中私が軍隊にいたときの中隊長の演説を聞くがごとく、あまりの烈しさに寒くなる思いさえしながら、しかしその情熱に圧倒され耳を傾けた。

④ 世盲連／世盲協、合同ワーキング・グループ報告

報告が、ボルター委員長から行われた。その中で、各国から世盲協代表会員中、盲人団体の代表は「少くとも半数でなければならない」または「半数以下であってはならない」という条項について、英語を話す国民のみに通用する困難な討議が始まった。そこで、世盲連からすれば、「半数以下であってはならない」とする表現は、解釈によっては、半数が入ればもう充分ではないかという取り方になるので、「少くとも半数でなければならない」言いかえれば半数以上であってもよいと取れる表現を採用する事になった。

世盲連・世盲協が使う合同のレター・ペーパーで、世盲協のマークを左に、世盲連のマークを右に印刷する場合、どちらが上座でどちらが下座かといった枝葉末節に至る討議まで行われた。

⑤ 世界航空運賃割引について

アメリカのシュナイダー氏が演壇に立った。彼はワシントンに在住、全盲である。アメリカ連邦政府からリハビリテーション職員、盲学校職員、統合教育教員等の教職員の養成事業を委託されている人で、元気な若き青年である。IATA（世界航空連盟）の中に、障害者に関する諮問機関があり、そこにはIATA役員と障害者の両者が入って委員会を構成している。ここは、機内での障害者への接し方、塔乗、切符の手続き、その他障害者の便宜のために種々討議をする機関であり、彼はその一員である。現在IATAでは、国際線に限り障害者の単独・介添共割引きを実施していないので、その理由説明があった。④単独・介添共、もし割引きした場合、利用者が激増して経済的破綻を来ます。⑤たくさん乗り込まれた場合、安全性に対し保障し切れない。現在IATAには、世界の航空会社中3分の2が加盟し、IATAとして障害者の航空運賃割引を禁じている。よって国際線に限り、どの航空会社にも割引制度が適用されていない。そこでIATAの逃げ口上としては、障害者の方からの運賃割引依頼の要望が少なすぎる所以、実施出来ないとの事である。この際、WCWBとIFBは共同して運賃割引運動に立ち上がってほしい。IATAの規約中200号・Eに「各々航空会社の独自の判断において、障害者の運賃割引をしてよい」という項目がある。よって、各国の団体において、自国の航空会社に波状陳情を行い、各個撃破をするとともに、その集計をし、両団体が合同してIATAにあたってもらいたいとの要望がなされた。

フィリピン代表から、「こちらに来るとき、フィリピン航空から“機内でケガをしても異議申し立てはしない”というサインをとられた」との報告もあった。

岩橋から、日本航空では、国内・国外線を問わず、機内の案内その他を明記した

点字のパンフレットが用意され、国内線では障害者、付添いとも各々25%の割引のある事をのべた。

この件については、異議なく両団体は協力する事を約束した。

⑥ IFB / WCWB 合同国際障害者年記念行事

世盲協と世盲連が、国際障害者年を記念して、西ドイツのバドベルレブルグにおいて9月22日～28日“重複障害盲に関する国際セミナー”を開催する旨の発表があった。現在、重複盲に対し手をついている国は僅少である。今後医学の発達により、死産の減少によって重複障害盲の激増は確実である。その時もし何らの対策、研究もなされていなければ、どのように対処するのか、世界的課題として重要である。

⑦ 身体障害者団体の設立

今まで身体障害者の団体として、身体障害者連盟（ofとforが合同）というのがあったが、これでは身体障害者自身の声が適確に伝わらないという理由で、身体障害者だけの世界的つながりをつくるため、ofの身体障害者団体がつくられた。これは、世盲連と同じように一般社会の無関心・冷遇に対し、厳しく抗議を行い、あらゆる会議に参加し、あらゆる場所で権利を主張する団体である。今年11月、シンガポールにおいて世界結成総会が開かれるが、今だ定款も作られていないが、そのうち作成し世界各国に配布するという事である。

⑧ 閉会

世盲協会長ノウイル夫人から、スウェーデン盲人協会、当ホテル、ボランティア、スウェーデン政府、国連各諸機関に対し、感謝の言葉がのべられ、閉会した。その節、世盲連会長ゾンターク博士から岩橋に対し、世盲連の前会長ファティマ・シャーに誠に素晴らしい賞を贈って頂き感謝する。今一つのお願いは、日盲連はかつて世盲連に加入していたが、ここ数年来書簡を送れども何の返事もない。世盲連から脱会されたのか、加盟を続けるのか、その意思を直接日盲連から返事をするよう労を取って頂きたいと話しがあった。世盲協元会長エリック・T・ボルター氏の方からも、「国際障害者年にちなんで特に協力という形で最もふきわしい姿として、ファティマ・シャー夫人に岩橋賞が贈られた事を感謝する。確かにシャー夫人は、世盲協側としては、時にはトラブルを起こす人として問題の多い人ではあったが、中途失明者として、また主婦という立場にありながら、盲人のために働いた事は素晴らしい。そうした壁をのり越え、岩橋氏が彼女を推挙した事は、またそれ以上に素晴らしい事である。」との挨拶があった。

* 以下は次号（第16号）に掲載いたします。